



WHO CAN KILL A CHILD?

これは——SFでも小説でもない現実に取りうる恐怖だ!

ザ・チャイルド

(イーストマン・カラー)



マヌエル・ペレス 製作
 ナルシソ・イバネス・セルラドール 監督
 ルイス・ベニャフィエル 脚本
 J.J. プランズ 脚本
 ホセ・ルイス・アルカイネ 撮影
 ワルド・テ・ロス・リオス 音楽

ルイス・フィアンダー
 フルネラ・ランサム
 アントニオ・イランソ
 ミゲル・ナルロス
 マリア・ルイス・アリアス
 マリサ・ホルセル

5月14日(土)よりロードショー

＊お得な特別鑑賞券 ¥900 (一般1,200円 / 学生1,000円の処) 絶賛発売中!

有楽町
日劇前

ニュー東宝
シネマ 1

(571)
1946



'77恐怖・怪奇・SF映画祭批評家大賞受賞

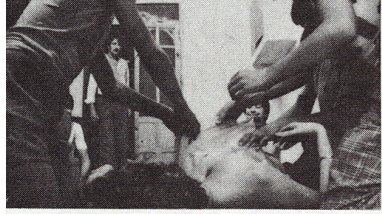
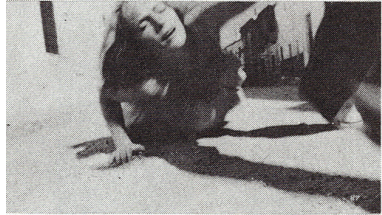
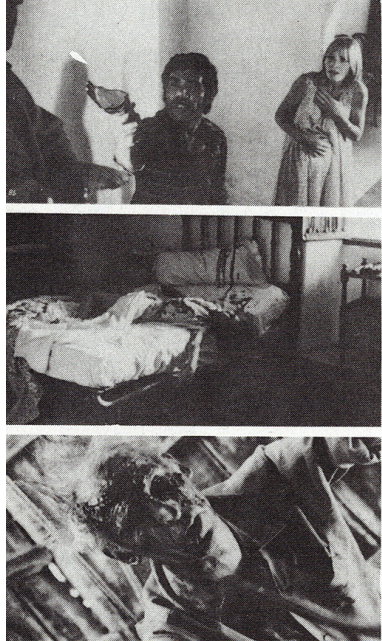
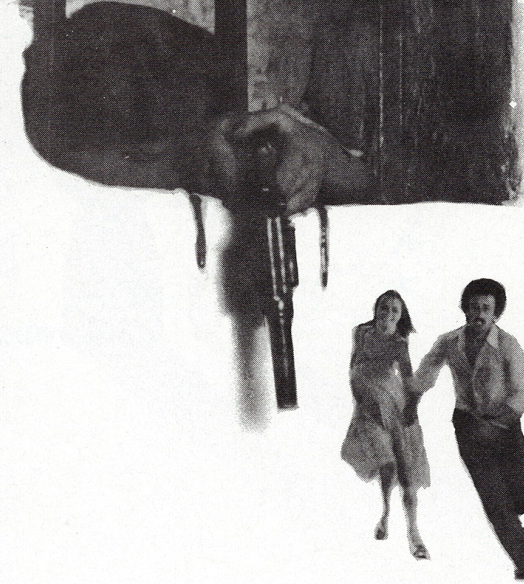
ザ・チャイルド

▶スタッフ◀

製作…………マヌエル・ペレス
 監督…………ナルシソ・イバーネ・セルラドール
 原作…………J. J. プランス
 脚本…………ルイス・ベニャフィエル
 撮影…………ホセ・ルイス・アレカイネ
 編集…………ファン・セルラ
 アントニオ・ラミレス
 音楽…………ワルド・デ・ロス・リオス

▶キャスト◀

ルイス・フィアンダー／ブルネラ・ランサム
 アントニオ・イランソ／ミゲル・ナルロス
 マリア・ルイス・アリアス／マリサ・ポルセル



■解説

これはSFでもなければ小説でもない。明日にでも起りうる恐怖だ。

「戦争」飢餓「破壊」大人達の自己中心的な思考、行動によって今までもどれ程の無垢な子供たちの命が失われてきたであろうか。

何ら社会に対する発言権のない子供たちは小さな軀となって大人たちの無知、無能な支配のために減らされていった。

現実問題としても、親権を放棄した母親が生れたばかりの子供をロッカーに捨てたり、金を奪取するために子供を誘拐したり、となにかにつけて利用、犠牲になっている。

子供たちの亡骸は消え去ったが、彼らの魂もこの世から消滅したのだろうか。黙って殺されていった子供たちの魂がいまも怨霊となってこの地を彷徨い、大人たちに復讐する機会を狙っているのかも知れない。

映画は三人目の子供を妊娠中の妻とその夫が主人公で、二人とも心の底から子供を愛していた。そんな二人が新聞、TVを見る度に子供がなにないで犠牲になったなど、という報道が耳に入り少なくなからずいい気持ちになる筈がなかった。そんなことから夫は妻に「二人の子供もいることだし三人目の子供は堕したらどうか」と自分の考えを明すと、妻は意外な目で夫を見る。勿論、妻は夫の言葉に同意する分けがない。

「子供は天からさずかったものである」。それが故に墮すなんて、という気持ちなのだ。二人は翌朝、スペイン本土からアルマンソール島（観光地）に渡り、とてつもなく恐ろしい事に出喰わすのだった。

幼い子供たちが自分の体すら自由の利かない老人を撲殺したり、夫妻と同じ旅行者夫婦とその娘までも鋭い刃物で刺殺するという想像を絶することを平気でやるのだった。身の危険を感じた二人は島を逃げ出そうとするが、子供たちは執拗に追ってくる。二人は命からがら留置所に隠れ一夜を過そうとベッドに横たわる。ところが妻は発狂したかと思うほどの声をあげ、「お腹の子供に殺される」と夫に訴える。

実は昼間、出逢った女の子にお腹をさすられた為に起ったものであることが妻の訴えで分った。だが夫がどうすることも出来ない。妻の脚元には鮮血が流れ落ちていた。

こうして監督のセルラドールは場面／＼はもろろんのこと全篇を通した恐怖感を細部に渡ってにじみ出している。音楽は「真夜中の恐怖」等の一連のスペイン作品を出掛けているワルド・デ・ロス・リオスが担当。子供たちは現地の素人俳優を起用している。

（原題「誰に子供が殺せるか」スペイン映画。一九七六年度製作。上映時間一時間五二分）